

わたしは、結果的には、入院治療を選びました。

そのとき、私はちょうど卵巣嚢腫を患っており、手術をする必要がありました。その手術と同時に、精神科にも入院することになったのです。

このことが決まったとき、私は思いました。

「これで楽になれる」

このようなことをいうと、

「赤ちゃんの世話を放棄して、なんて無責任な母親でしょう」

と思う方もいらっしゃるかもしれません。

けれども、本当に心からほっとしたのです。

今なら絶対考えられないことなんですが・・・

私の心身のバランスは極限まで崩れていました。

「死にたい」「子供と一緒に死のう」と毎日毎日考える日々。

そして、日に日に薄れていく記憶。

一日、自分が何をしていたのか、どうやって子供と過ごしたのかが分からないのです。

私は自分の変化に気づきました。

記憶が途切れる・・・

これは、とても恐ろしいことです。

そして、とうとう私は新聞の文字が読めなくなりました。

「失語症」

のようになったのです。

日本語が日本語として認識できなくなりました。

文字を追うけど、意味が全然分からないのです。

それどころか、目を追うごとに、今度は夫が話している声が、まるで外国語を聞いているように理解不可能になるときがでてきました。

私は、絶対おかしい！

そうおもいつつすごしていたある日・・・

一瞬正気に戻ったとき、私の目の前に息子がいました。

3歳ちょっとの幼い息子です。その息子が泣いていました。

私は手にボールを握っていました。子供用の小さいゴムボールを。

それを、息子めがけて投げている・・・らしいのです。

でも、私には全然記憶がありませんでした。

息子は、ボール投げが嫌いでした。だから、いつも私は息子を相手にボール投げをしたことはありませんでした。

それなのに、なぜ、私の手にボールが握られてるんでしょう？

なぜ、息子は泣いているのでしょうか？

そう思ったとき、私はぞっとしました。

「私は息子に危害を加えようとしたのだ」

それは、確信でした。

わたしはすぐさま地元の心療内科に電話をし、予約を入れました。

そして、そのまま続けて夫の職場に電話をしました。

私が病院に行く間、子どもの面倒をみてもらうために。

夫は、すぐさま飛んで帰ってくれました。

そして、わたしは・・・

タクシーを呼び、そのまま病院へ向かい行きました。

病院で診察を受け、夫とお医者様と相談し、とんとん拍子に入院することが決まりました。

そのときの先生の言葉を今も忘れません。

「がんばったね。もう十分じゃないですか？休みましょう。入院することもできますが？」

「お願いします。入院させてください。」

私の答えは即決でした。

先生の言葉は、どれほど私の心を軽くしたことでしょう。

これで、思い切り休むことが出来る、そう思いました。

でも、精神科への入院は、偏見がまだまだありました。

なので、表向きは「卵巣嚢腫の手術」ということでの入院となりました。

術後、精神科へ転院することになりました。

この考慮も、家族や退院後の私にとっても心休まるものでした。

こうした先生方の配慮に、いまでも心から感謝しています。

こうして、わたしの入院生活が始まりました。

わたしが今やらなければならないことは、一刻も早く、体調を整えること。

1秒でも早く、心身の健康を取り戻すこと。

そのために、十分に寝ること。何も考えずに体を休めること。

それが、一番の治療だと、信じて。

それこそが、子どものためであり、家族のためであり、ひいては私自身のためでもあるのだと信じて。

私の入院生活が始まったのです。

ところが・・・その入院生活にも、小さいけれど、波風がたつことになったのです。

<続く>